ダウン症、詩は生きる力

神戸の村上有香さん(20) 初の創作集

小学4年からオリジナルの詩を書きためてきたダウン症の村上有香さん(20)＝神戸市西区＝が、初の詩集「弱いはつよい」(風鳴舎)を出版した。詩を書く時は、「楽しさのメロディーが聞こえてくる」という独特の感性でつづった66編。大好きな家族や友人のこと、エネルギーあふれる日常など、約10年にわたる歩みが詰まっている。（中島摩子）

初出版した詩集「弱いはつよい」について語る村上有香さん(右)と母の喜美子さん＝神戸市西区

日常をユーモラスに表現、厳選66編

「世界中のみんなを笑顔に」

小学校低学年の頃の有香さんは、左右に揺れるろうそくの炎を見て「けんかしてる！」。トイレから出てきて「カブトムシみたいに水が流れた！」―。母の喜美子さん(58)は「私の感覚とは違う世界がある」と感じていた。ただ、有香さんが日記を書く時は「出来事を羅列するだけで、思いを表現することはなかった」という。

有香さんが小学4年の時、喜美子さんはテレビ番組で、ある小学校の先生が、子どもに文章を書かせる際のこつとして「身近なものをお題として与えてみて」などと話すのを聞いた。早速、ピアノ教室の先生が飼っているイヌについて有香さんに聞くと、「やさしいから たまにはほえる ワンワンワンワンワン」などと言葉があふれてきた。「日記とは別人。生涯忘れられない日になった」と喜美子さんは振り返る。

以降、「有香がぱーっとしゃべるものを、私が虫捕り網で全部捕るみたいに」メモし、それを有香さんが清書するというスタイルで、約200編の詩を生み出してきたという。

障害がある人がつづった詩を展示する「NHKハート展」に応募を重ね、青陽須磨支援学校(神戸市須磨区)中学部2年時の作品「お風呂を広くした」などで計6回入選。同校高等部時代の作品では「制服がアイスクリームのように溶けるような暑さだった 口から湯気がでそう」「私はややこしいティーンエイジャーです」など、若い感性とユーモアが光る表現が目を引く。

「詩を書くのが私の特技」と話す有香さんは現在、高齢者施設で非常勤職員として働きながら創作活動に取り組み、「世界中のみんなを笑顔にするのが私のできること」。

喜美子さんは「普通に喜怒哀楽があり、普通に悩んで、普通の人間だと知ってもらいたい」と話し、障害者への差別や事件が起きる中で「みんなが違いを認め合う寛容な世界になってほしい」と願う。

有香さんが詩集をPRする動画を公開中。https://youtu.be/guiiDWk8Suk

四六判、120ページ。1760円（税込み）。風鳴舎 ☎03・5963・5266

村上さんの手書きの詩

お風呂を広くした

はぁーごくらくごくらく
手足をのばした全き返る
心ぞうがつかてしまいそう」と言った
目はハート
大腸に花が咲いた

私は心の字が読める

遠くから手をかざして片目をつぶる
そうしたら心の字が見える
私はみんなの心の字が読める
お母さんの心には
「有香ちゃんが生まれてよかった」って書いてある
お父さんの心には
「有香ちゃんがいるから仕事がんばれる」って
書いてある
私はこの家に生まれてよかった

名前【　】

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。